様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８７１

研究課題名（和文）新自由主義的時空間と認識論的布置としての文学・映画・現代アート

研究課題名（英文）Neoliberal Space-Time and Literature/Film/Contemporary Art as Its Cognitive Constellation

研究代表者
吉本　光宏（Yoshimoto, Mitsuhiro）

早稲田大学・国際学術院・教授

研究者番号：８０５９６８３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：現代の文学や映画、アートが新自由主義的時空間を具体的にどのように概念化し、知覚の対象として提示し、さらに身体的に経験可能なものとして構築しているかを、表象イメージの役割の再定義化、および新自由主義的時空間の多面的分析を通じて明らかにした。また新自由主義的グローバリゼーションの限界を明確化するために、惑星的という概念の可能性を検討した。

研究成果の概要（英文）：This project attempts to analyze the relationship between neoliberal space-time and contemporary art, film, and literature. It examines how a variety of contemporary images and representations reflect neoliberal space-time experiences and at the same time how they articulate new types of spatio-temporality that make the neoliberal system perceptible. It also explores the idea of planetary as an alternative to neoliberal globalization.

研究分野：文学一般関連

キーワード：ポピュラー文学　SF　美術館　新自由主義　映画　都市空間　アート　惑星的

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで長くアメリカと日本で文学および映画研究に携わり、『陰謀のスペクタクル：〈覚醒〉をめぐる映画論的考察』（2012 年）や『イメージの帝国／映画の終わり』（2007 年）などの単著書を含む多くの成果をあげてきた。平成 24 年度からは《ショック効果》という鍵概念を軸に、現代ハリウッド映画と新自由主義の関係を分析する研究に従事した。研究を進めていく中で次第に明らかになったのは、（１）《ショック効果》が現代ハリウッド映画によって構築される複雑な時空間作用の一つの顕れに過ぎないということ、（２）新自由主義の時空間と文化的テクストの関係を人文学の観点から解き明かすためには、映画以外のメディアにも幅広く研究の対象を広げる必要性があることの二点である。時間の概念化や、相対的および関係的時間の問題をより深く探究するためには文学の理論的考察が必要不可欠であり、さらに現代アートの分析は、時空間の知覚や経験と身体性の関係の解明につながる多くの手掛かりを与えてくれると考えられた。個別の問題や特定のディシプリンに限定された理論的課題については、たとえば新自由主義的時間や物象化された空間についての美術史家ハル・フォスターやジョナサン・クレーリー、社会学者ジョン・トムリンソン、文学研究者ロブ・ニクソンの研究、新自由主義の時空間を弁証法的に分析する地理学者デヴィッド・ハーヴェイの一連の仕事、また SF 小説における時間構造を明晰に論じた比較文学者デヴィッド・ウィッテンバーグの著作など、すでに多くの優れた先行研究が存在する。しかし、新自由主義的な時空間が人文学に突きつける課題に正面から向き合った研究は、まだその緒についたばかりと言える。

２．研究の目的

時間と空間を直接認識することはできないが、それなしではいかなる社会経済システムや人間の経験も成立しない。これは、グローバル資本主義によって支配的に構成されている現在の世界においても同様である。こうした状況で、文学や映画、現代アートなどに代表される表象文化は、新自由主義的時空間を認識可能なイメージに変換し、その消費者をシステムに順応させることに荷担している。その一方でそれらが再帰的表象イメージとして機能する時、新自由主義的時空間に対する批判的契機となる可能性を秘めていることも否定できない。現代の文学・映画・アートが新自由主義的時空間を具体的にどのように概念化し、知覚の対象として提示し、さらに身体的に経験可能なものとして構築しているかを、（１）新自由主義的時空間における《速さ》と《遅さ》、（２）immediacy あるいは媒介と非媒介の弁証法、そして（３）複雑化する時間と空間、という３つのテーマに焦点を当てながら理論的に考察すると同時に、具体的な作品を詳細に分析することによって明らかにすることが、本研究の主要な目的である。これらの目的を達成するために、特に次の二点に焦点を合わせて研究を行った。

（a）表象イメージの役割の再定義化：地理学に立脚しながらその枠組みをはるかに超えた批評理論の構築に成功しているデヴィッド・ハーヴェイは、時空間を分析する理論的枠組みを二つの異なった概念のシリーズを交錯させることで構築しようとする。一つは時空間を絶対的、相対的、あるいは関係的な観点から考える系列であり、もう一つはそれを知覚されたもの、概念化されたもの、そして生きられたものに分類して分析するアプローチの系列である。こうした６つの時空間概念のどれをとっても、それぞれ説得力に富んでおり、時空間の分析を行うためには６つすべてのカテゴリーが重要であるというハーヴェイのポイントは、的を射た主張であると言える。だが、理論の精緻さが必ずしも効果的な分析に結実しない危険性があることも確かである。６つの時空間カテゴリーが生みだす組み合わせを実際的な問題に応用しようとすると、複雑に入り組んだ様々な可能性によって現実の認識がかえって困難になり、機械的な分類が分析に取って代わるという皮肉な状況に陥りかねない。言うまでもなく、新自由主義的時空間を理論的あるいは実証的に分析した社会科学の論文や研究書は、万人に読まれ議論されているわけではない。これに対して、本研究の分析対象である文学、なかでもＳＦを含むポピュラー文学やハリウッドを中心にした娯楽映画、ブロックバスター型展覧会とも呼ばれる企画を含めた多彩なマーケティング戦略を駆使して数多くの観客を集める美術館などは、社会科学的分析や批評理論に匹敵するほど複雑で示唆に富んだ新自由主義的時空間のイメージを「エンターテインメント」として提供し、観客や読者の意識に直接働きかけている。しかしこれらの表象イメージは新自由主義的時空間をたんにストーリーの一要素として主題化したり、修辞学的な方法で間接的に言及したりするのではない。タイムトラベルや可能世界をモチーフにしたＳＦ小説の読者は、時間の問題を図解したストーリーを読むのではなく、時空間が概念化されるプロセスに能動的に参加している。映画の観客も絶対的・相対的・関係的な時空間を知覚するのであって、時空間についての物語を受動的に消費するわけではない。つまり本研究は表象イメージを社会理論や哲学的考察の正しさを証明するために使われる親しみやすい具体例としてでなく、それ自体が時空間についての一つの理論的考察であり、かつ実際に時空間を構成するものとして分析する。

（b）新自由主義的時空間の多面的分析：テイラーの科学的管理法、未来派のテクノロ

ジー賛美、チャップリンの『モダン・タイムス』(1936 年）などによって象徴される《スピード》はモダニティーの鍵概念であり、新自由主義が支配的な世界においても《スピード》の重要性は増しこそすれ決して減じることはない。しかし、拡張し続けるグローバル資本主義において《速さ》や《即時性》（immediacy）と少なくとも同程度に重要な役割を果たしているのは、それらと正反対の《遅さ》である。たとえば結果が深刻で破滅的であるにもかかわらずその進行速度の《遅さ》のために不可視化された環境汚染は、記憶の忘却を頼みにして未来へと先送りされる負債であり、不可視化された暴力でもある。さらに遠隔操作で敵を攻撃する無人ドローン機という、やはり暴力を不可視化するテクノロジーの場合、攻撃の即時性という点では immediate でありながら、敵から数千キロ離れた反撃を受けない場所でビデオコントローラーを使ってミサイルを発射するという点では、immediate とは正反対の高度に媒介された（mediated）関係性を作り出している。本研究ではこうした例に見られる《速さ》と《遅さ》、《媒介》と《非媒介》といった従来の二分法では理解できない新自由主義的時空間の特殊性を多面的に分析することを試みる。

３．研究の方法

挑戦的萌芽研究ということもあり、手堅く研究成果をまとめるのではなく、今後の研究につながるような新しいアイデアや研究の種をできるだけ多く見つけ育てていけるように、多角的な視点から様々な活動を同時進行させたつもりである。文学研究や映画・視覚文化研究それぞれに備わった長所を最大限生かしながら、変化の到達点が見えにくい混沌とした状況にある人文学の刷新へとつながる可能性のある新しい研究領域を生みだそうとする、ある意味無謀とも言える本研究は、既存のディシプリンの枠組みに容易に収まりきらない問題を扱っている。そのため、研究遂行に必要な先行研究の広く共有されたリストがすでに存在しているわけではなく、課題に関連した研究書や論文、資料などを根気よく一から探し出す必要がある。この点に関して、研究一年目である平成 27 年度に大きな成果を挙げることができた。さらに研究初期の段階でプリンストン大学およびハーバード大学で講演・発表をおこない、アメリカを拠点に活動する関連分野の研究者から様々なフィードバックを得たことも、その後の研究を進める上で貴重な経験となった。ただし、「４．研究成果」でも説明しているように、結果的に当初の研究実施計画から少し逸れてしまったことを記しておかなければならない。まず予定していたほど美術館でのフィールドワークを実施することができなかった。これは制度および建築としての美術館と新自由主義的時空間について理論的考察が研究期間終了まで思いの外深まらず、フィールドワークの目的を明確化することできなかったためである。海外からの研究者招聘に関しては、残念ながら招聘予定者とスケジュールの調整をつけることができず、代替プランを考えることになった。

研究を理論的文献の精読、具体的作品の分析、そしてフィールドワークを同時進行させ、区切りごとの研究成果を学会やシンポジウムで発表し、そこでのフィードバックをもとにさらに精読、分析、フィールドワークを行うというサイクルを反復するのが本研究のスタイルであった。その過程で徐々に明らかになったのは、研究の全体的な方向性を転換する必要があることである。先ず第一の問題は、新自由主義という概念そのものの限界である。必ずしも誤った概念ではないものの、現在グローバルな規模で起きている大きな変化を説明するには新自由主義という概念の有効性は限定的であり、かつその歴史的射程も短すぎる。新自由主義という概念を保持しつつ、今後は資本主義というより大きな文脈のなかで、時空間の知覚や表象の問題を考えていく必要がある。さらに新自由主義という概念の相対化にともなって、グローバリゼーションの重要性も再検討されなければならない。つまり新自由主義と密接につながったグローバリゼーションという考え方の限界を乗り越えるためには惑星的な視点が必要不可欠であり、エコロジーの問題を避けて通ることはできない。第二に、理論的言説と文学や映画を含めた芸術のあいだに具体的な関連性を見つけることは容易ではないことが、研究期間全体を通じて明らかになった。精読をした重要文献から多くのことを学んだが、しかしこの課題を完全に克服している著作には残念ながらまだ出会っていない。また自分自身も解答を見つけることができたわけではなく、今後もこの方法論的問題と格闘していくことになるだろう。

４．研究成果

平成 27 年度は主に（１）新自由主義的時空間における《速さ》と《遅さ》、（２）immediacy あるいは媒介と非媒介の弁証法、（３）複雑化する時間と空間、という３つのテーマの全体像をより深く把握するための予備的考察に着手し、個別の問題やテクストを分析する際に拠り所となる理論的基礎固めを終えるという課題に集中して取り組んだ。研究計画調書で挙げた文献を精読することだけではなく、調書を準備している段階では気づいていなかった、Toscano and Kinkle, *Cartographies of the Absolute*、Grégoire Chamayou, *A Theory of the Drone*、Paolo Virno, *Déjà Vu and the End of History*、Steven Shaviro, *No Speed Limit*、Mark Fisher, *Capitalist Realism*、Hito Steyerl, *The Wretched of the Screen* などを含む多くの重要な理論的テクストを新たに文献表に加え

ることができたのは大きな収穫である。平成27年11月には、米国プリンストン大学で開催された“Asia・Theory・Visuality”というタイトルのシンポジウムに招待され、アジアの視覚文化と新自由主義に関する基調講演をおこなった。また平成 28 年３月に米国ハーバード大学で開催されたアメリカ比較文学会の年次大会において、現代日本文化と新自由主義的時空間について発表をおこなった。

平成27年度に引き続き平成28年度も、現代の芸術や文化と新自由主義的時空間の関係性について多面的な分析を行った。（１）新自由主義的時空間と映画・視覚文化・文学の関係の理論的分析を進め、（２）現代アートと美術館が新自由主義的時空間とどう関わっているかについての考察を開始し、（３）これらの研究に基づいた論文の執筆し講演・学会発表を行うことを活動目標として研究に従事した。

平成28年５月に香港大学（University of Hong Kong）で開催された国際シンポジウム“Contextualizing Asian Ecocinema”での発表、７月のシンガポール国立大学（National University of Singapore）での講演、９月にペンシルベニア州立大学（Pennsylvania State University）で行われたアメリカ比較文学会“Globe, Planet, World: Comparison and the Problem of Disciplinary Scale”での発表、11月の慶応大学で開催されたシンポジウムでの発表など、研究成果を公にし関連分野の専門家から貴重なフィードバックを受け取る多くの機会に恵まれた。シンガポールでは映画と都市空間の研究者である G・シム教授とともにフィールドワークを行い、シンガポールのグローバリゼーションと美術館・博物館の関係について意見交換を行った。また平成 28 年９月から平成 29 年１月まで米国プリンストン大学東アジア研究科に客員教授（visiting professor）として滞在し、博士課程のセミナーを教えながら現地の研究者や大学院生と、特に映画と文学について議論や意見交換を行った。また 12 月にはアメリカ各地の大学や日本の大学の研究者を招き、新自由主義的言説空間における文学・映画研究の可能性についてのシンポジウムをプリンストン大学で開催した。

平成29年度も、現代の芸術や文化と新自由主義的時空間の関係性について多面的な分析を行った。前年度までの研究活動の結果、新自由主義がグローバルに支配的な文化状況をより深く理解するためには、当初設定したよりも研究範囲を拡大する必要性が明らかになったわけだが、本年度はその結果に基づき、新自由主義的時空間と映画・視覚文化・文学の関係を理論的に分析した文献に加えて、エコロジーや惑星的視点に問題関心の射程を広げて研究書や論文を集中的に読み進め、「挑戦的」という本研究のカテゴリーにふさわしい新しいアイデアや研究の種を多数見つけることができた。さらにポストモダン建築としての美術館と伝統的都市空間の相互関係性を調査するフィールドワークを、平成29年８月に金沢、11月にヘルシンキ、平成 30 年２月にスペインのビルバオで行った。一方こうしたフィールドワークと並行して、これまでの研究の部分的成果や仮説の有効性を確かめるために、さまざまな場所で口頭発表や講演を行った。平成 29 年６月に韓国の高麗大学で開催されたアジア学会 AAS-in-Asia において、おもに伊藤計劃の小説の分析を通じて、新自由主義的状況における SF 小説とユートピア／ディストピア・イメージについて考える論文を発表した。11月にはベルギー自由大学で、新自由主義とデジタルメディアが生み出す仮想空間における民主主義の可能性について講演を行い、また平成 30 年３月にワシントンで開催されたアメリカ・アジア学会 AAS の年次大会では、Japanese Studies と Planetary の概念に焦点を合わせたパネルに参加し、日本の現代史と新自由主義の関係を惑星的観点から見直す必要性についての発表を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① YOSHIMOTO Mitsuhiro. “Nuclear Disasters and Invisible Spectacles,” *Asian Cinema*, a special issue on Asian Eco-Cinema, Winter 2018 (in print). 査読有

〔学会発表〕（計 11 件）

① YOSHIMOTO Mitsuhiro. “The Planetary and the Japan Problem.” For the panel “Japanese Studies in the Age of the Planetary.” Association for Asian Studies Annual Conference. Washington D.C. 22-25 March 2018.
② YOSHIMOTO Mitsuhiro. “The Changing Face of Japanese Studies.” For the Japanese Studies 30th Anniversary Conference. University of California, San Diego. 21 February 2018. 招待講演
③ YOSHIMOTO Mitsuhiro. ““Cyberdemocracy or Cyberpopulism?: A Crisis of Political Reason in Contemporary Japan.” The conference/workshop titled “Digital Youth in East Asia: Theoretical, Methodological and Technical Issues.” Université Libre de Bruxelles. 11-13 Oct 2017.
④ YOSHIMOTO Mitsuhiro. “‘The World Was Not Enough’: Itō Keikaku’s Vision of Dystopia/Utopia.” For the panel

“Asian Ecocriticism.” Association for Asian Studies in Asia Conference –“Asia in Motion: Beyond Borders and Boundaries.” Korea University. Seoul, Korea. 24-27 June 2017.

⑤ YOSHIMOTO Mitsuhiro. “Kurosawa, Shakespeare, and the End of the World.” International Conference on Shakespeare Film: East and West. Co-organized by Waseda University and the University of Birmingham. 21-22 January 2017. 基調講演

⑥ 吉本光宏「問題としての世界文学」、シンポジウム「世界文学の現在」、慶応大学日吉キャンパス、2016年11月5日。

⑦ YOSHIMOTO Mitsuhiro. “English, Subculture, and the Unconscious of World Literature.” For the panel “Globe, Planet, World: Comparison and the Problem of Disciplinary Scale.” ACL(x) Conference on “Extra Disciplinarity.” Pennsylvania State University. September 23-24 September 2016.

⑧ YOSHIMOTO Mitsuhiro. “Cognitive Mapping or World Building? The World in Contemporary Japanese Popular Culture.” Asia Research Institute Seminar. National University of Singapore. July 19 July 2016.

⑨ YOSHIMOTO Mitsuhiro. “Cinematic Imagination and Nuclear Chronotopes.” The Conference “Contextualizing Asian Ecocinema: Past and Future.” 27-28 May 2016. The University of Hong Kong.

⑩ YOSHIMOTO Mitsuhiro. “A Few Preliminary Observations on Otaku Theory and the Cultural Logic of Neoliberalism.” American Comparative Literature Association Annual Meeting. Harvard University. 18-19 March 2016.

⑪ YOSHIMOTO Mitsuhiro. “Asia as Visuality.” Asia·Theory·Visuality Conference: “The Invisible.” Princeton University. 13-14 November 2015. 基調講演

〔図書〕（計2件）

① Christophe Thouny and Mitsuhiro YOSHIMOTO, eds., *Planetary Atmospheres and Urban Society after Fukushima* (Palgrave Macmillan, 2017). 218 pages. 査読有

② 吉本光宏（分担執筆）「ニューハリウッドとブロックバスター映画」「グローバルハリウッドとデジタルメディア」、『アメリカ文化事典』丸善出版、2017年。 査読有

6．研究組織

(1)研究代表者

吉本　光宏（YOSHIMOTO Mitsuhiro）
早稲田大学・国際学術院・教授
研究者番号：80596833